

神の母聖マリア（降誕の八日目）

第一朗読 民数記 6・22-27
第二朗読 ガラテヤ 4・4-7
福音朗読 ルカ 2・16-21

2026.1.1 11:00 ミサ
カトリック高円寺教会
主任司祭 高木健次神父

わたしたちは1週間前に主のご降誕のお祝いをして、救い主がこの世界にすでに与えられたのだということを思い起こし、記念して、信仰を新たにしたわけです。希望はすでに与えられている。しかし、それをあたかも無いものかのように色々な現実を通して思ってしまう、そういう誘惑があると言えます。

今日は、冒頭に申し上げましたけども、カトリック教会にとっては「世界平和の日」でもありますけども、この「世界平和の日」にあたって教皇様は毎年メッセージをお出しになっていますが、レオ14世教皇様は今年のメッセージの中で、光を忘れてしまうということについて触れられています。ちょっと朗読します。

「残念ながら、反対に、光を忘れることもあります。そのとき人は、現実感覚を失い、暗闇と恐怖によって特徴づけられる、分断され引き裂かれたものとして世界の姿を描き出すことに屈します。今日、多くの人々は、希望を欠き、他者の美を見失い、神の恵みを忘却した物語を現実的だと呼びます」っていうわけです。

平和っていうものが遠い理想だと考えるときに、その平和を否定するあるいは戦争するということに痛みを感じなくなる、と教皇様はおっしゃってるんです。それが現実だから、と。

でも、平和というのは近くにあって実現可能なんだということを、その希望を失わないようにしましょうとおっしゃってるわけです。

このメッセージの中で更に、ちょっとはっとさせるような言葉を教皇様が紹介してくださいってるんです。これは、教皇様が度々引用される聖アウグスティヌスの言葉ですけども、「眞に平和を愛する人は、平和の敵をも愛する」。そうですよね。多くの戦

争が平和を守るためにやっている口実で始まるわけですけど、「眞に平和を愛する人は、平和の敵をも愛する」。

この言葉を聞いたときに、わたしたちは、今平和を壊そうとしているっていう自分以外のいろんな国の指導者とか人を思い浮かべるかもしれませんけども、一方で、わたしたちが平和の敵となっている瞬間もあり得るわけです。身近な人との間で、また国レベルでも。でもその時にも、平和を愛する人がわたしたちを愛し続けて、平和への道へと連れ戻してくれるということも経験を振り返ればあったんじゃないかなと思うんです。

ちょっと歴史の話というか、フィリピンの第6代大統領、エルピディオ・キリノ大統領——戦争が終わった直後のフィリピンの大統領ですけども——その大統領は奥さんや子どもたちが戦争で日本軍に殺されてるわけなんですけども、でも大統領になって、フィリピンで刑務所に入っていた「戦犯」って言われた我が国の兵士たちのB・C級戦犯を、最初まず大統領の権限で日本で服役する——つまりはもう死刑にはしないってことですね——日本で服役するっていうふうにして、でもそれはもちろん当時のフィリピンの人たちの中では全然人気のない決定だったわけですけど、だからその後、大統領選挙で落ちてしまうわけです。でも大統領最後の日に、日本で服役しているその戦犯たちを恩赦で刑務所から釈放する、つまり自由にする、そういう決断を最後の日にされたわけです。それは、もちろん自分が政治的に生命を終わるっていうことを分かっていながら、自分自身もそういう恨みの体験がありながら、でも日本とはこれからも付き合っていくんだから、未来の世代に恨みを残さないようにという決断なんだ、と。

今、このキリノ大統領の石碑っていうのは日比谷公園の中にもあるんですけど、でも我が祖国は——キリノ大統領だけじゃないけどね——そのことをあんまり知らないというか、忘れてしまっている。また、キリノ大統領以外でも、平和を壊した者と見える相手でも「平和を築いていくためには、平和の敵をも愛する」っていう形で、そういういろんな人の思いの中で、我が祖国ももう一度国際社会の中で一員になっていくっていうことをやっぱり忘れてはならないように思います。

ちょっと話が重く、大きくなりましたが、個人のレベルでも、わたしたちがいろんな形で平和をぶち壊してしまうような言動をすることがある。その中でもでも付き合い続けて愛し続けてくれる多くの人たちがいて、今の自分があるんじやないか。そういう人たちの顔を思い起こすことを通して、自分の心は回心へと導かれていくんじゃないかなと思います。

わたしたちが今日——教皇様と共に世界の平和のためにお祈りする日でありますけども——平和を祈るということは、自分自身の回心を祈ることから始めなければならない。誰か他の人がっていうようなことではなくて。平和を祈る者は回心を祈る。そして、そのためには神様の力、助けは無限に与えられるんだという希望がある。

「神の国は近い」っていうイエス様のその宣言を本当に信仰を持って受け取る。「平和があるように」というイエス様の宣言がわたしたちの中に実現するんだという思いを持つ。でも、それが——繰り返しになりますけども——わたしたち自身の心の中から始まらなければ、その祈りは言葉だけのものになってしまうかなと思います。

年の初めにちょっと重くなりましたが、今日、教皇様と共に、わたしたちがこの一年も平和を自分の心の中に、そして他の人との繋がりの中に、そして、みこころならばこの社会そして世界に、平和の道具となっていく。その恵みが与えられることに希望を置きながら、全世界の教会と共に、世界の平和のためにこのごミサをお捧げしたいと思います。

参照：第59回世界平和の日_教皇メッセージ
<https://www.cbcj.catholic.jp/2025/12/24/35928/>

ミサ説教はカトリック高円寺教会ホームページの「ミサ説教」のページにも掲載されています。

PC <http://www.koenji-catholic.jp/cgi-bin/wiki/wiki.cgi>
携帯 <http://www.koenji-catholic.jp/mobile/>